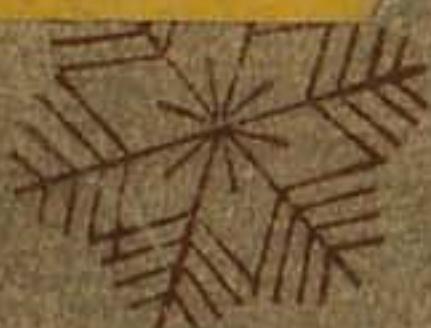
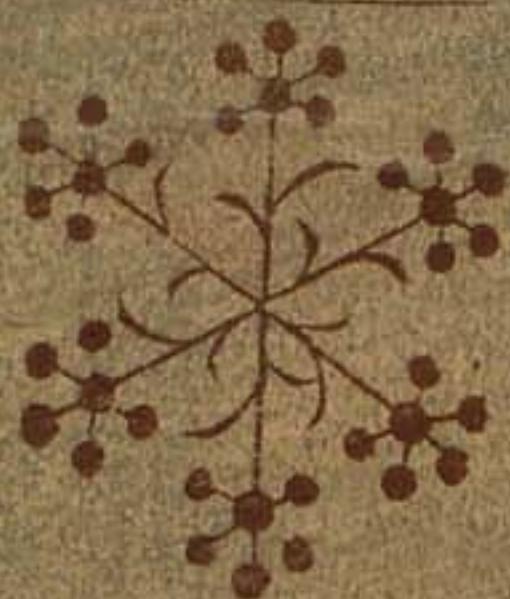


人
也
不
可
以
不
知
也

六八三



北越雪譜二編卷之四

目録

- 异獸
○ 弘智法印
○ 白鳥
○ 浮島
○ 美人
○ 苗場山
○ 鶴恩小報
○ 三四月の雪
○ 火浣布
○ 土中の舟
○ 両頭の蛇
○ 石打明神
○ 峨眉山下標準

通計十三條

雪譜二編卷下ノ下是ヨリ四ノ卷

廿三ヨリ

文溪堂藏

北越雪譜二編卷之四

越後 江戸

鈴木牧之編選
京山人百樹增修

魚沼郡 捩内カツノシロより十日町へ越す所七里あまり村へあまり山中の間道
ありまつてある年夏のうち十日町のちと問屋わたりの内問屋白編
うふやどりをさがるべからひうけりゆきの日の畠をぐらん竹助とのふ
剛夫をえても荷物をかきそそいびたてけりかくて途も稍く半ふい
するこう日ごとハセツふちと竹助もとくともものかうの石ふ腰かけ
焼飯をうひゆる小谷間の根籠をかくよひて來る者ありちらくよりた
を見まく猿ふ似て猿ゆもありも頭の毛長く脊ふたまうが半ハちう
丈ハ常並の人よりなまく顔ハ猿ふ似て赤りほど眼大小して光りあり竹
助ハ剛夫者ゆゑ用心ふきて山刀を提ヒラギナ、斬んと身をまへけるふ
此よりはさる氣色もろく竹助が石の上ふをまつて焼飯ふ指ハサミてくまと

とふきぬあり竹助とおえと投うけよどまつげふくひり是ふを
竹助心をやうと又もあえけとどらうとひかり竹助のゆう
我ハわうの内より十日町へゆきのうへもそひをうがて又まさら
をともそべしをぎのつひあまやくとえもうとまなたは荷物をせ、
んとせふうの荷物をとくとくかうとがくふうけまき立てやく
竹助とくとくの礼ふまきをなまくとくとくとあくふつまえゆく
かのうのふうのふうのうれいとくとく竹助ハ嶮岨の道もこまづなあゆをく
あすそ一里半あまりの山をまちとこそと池谷村ちくくふりうと一時荷物
をだちうと山へうけのぐるそのもまき事風の如くうじと竹助が十日町の
問屋ふくとく語りとくとく今ふりひつては是今より四十五年以
前の事ありその頃ハ山をまちうりのをりくハ此異獸を見つゝの
もありとぞ○前小ゆふ池谷村の者の話小我と十四五の時村うちの娘

雪譜二編卷之下

廿四

文溪堂藏

小機の上手ありと問屋より名をさへそちをもつてらきひまご
雪のまえのうへる肉のゆふ機を織りゆふ肉の外ゆ立たるを
もととが猿のゆふゆく顔赤くざからうも長くとまく人よりへ大
きうがきのとまけり此時家内の者ひまう山をまがふりとむすり
あまびとまく小慎とむどうき逃んとまくと機ふかくよとば腰ふまに
つくる物ありと心ふまくせどももうちうのうの立まうりうびで
かまとどりゆとふ立まうり小飯櫃ふ指と欲きまぬうり娘比異獸の
事をもゆく聞くのえ飯を握りてニツニツあえけよどまつげふ
持まうけりうち家の人うき時ハをりく來りく飯をもふゆ急
後少ハ馴くとまくとまくとくをり○え此娘 尊用うりと
急のちうみをおりかけふ折とく月水ふうりと 御機屋小入る事
あらず 御機屋の事初編小委く記す手を停め居まく日限少後了娘ハまくうり双親も

此事を患ひ歎きけり月やより三日小あつる日の夕と家内のもの農業よりかへざるをあり一ふやかの夕とがりゆくまでより娘へ下りのひごとく月やのうとひをかうつ粟飯をみぎとあくまどとのごとくもぐ立までもあらりのあらまつてやがてなちまうけりまた娘ハ此夜より月やをととまししやゑ不思議とあらひあら身をきよめて御機を織果ちの父問屋(持去り)往着(とおもへ頃娘時あらず俄小紅潮(あらわ)ふうりのあまく我歎(かげき)を聞てかのめ我を助(き)さんと聞く人々不思議のあらひをあけりと語りぞのころ山中ゆくなまさる小見よるのもあり一人ゆても連ある時ハ形を見せどとぞ又高田の藩士材用ゆき樵夫(きこう)をあらぐ黒姫山小入り小屋を作りて山小日をうつせ時猿小似(あらわ)猿(あさり)もあらまる物夜中小屋小入りて焼火(ひ)小あらまつたけ六尺ぞり赤髮裸身通身灰

山中異獸の圖

雪譜二編卷之下

廿五

文溪堂藏



雪譜二編卷之下

廿六

文溪堂藏

此圖畫牧之筆

色ふくもの脱うる小似うり腰より下小枯草をもと此物よく人のいふ
ことあるがひくのちゆよく人小駒（こま）と高田の人のくすき按るふ和漢三
戈圖會寓類の部小飛驒美濃あるハ西國の深山小も如件異獸ある事
をあそりまとざるの深山小もあるものとべ

○火浣布

空曆年中平賀鳩漢源（きくけいげん）火浣布を創製（くわうせい）火浣布考を著（あらわ）和漢の
古書を引本朝未曾有の奇工（きこう）小誇（やか）より没（めつ）してのち其術（そのじゆ）をもとず好事
家の憾事（憾事）ともあらず小我が嘗（なま）火浣布を作（つく）るの石を産（うなが）す在（あ）所も
金城山。巻機山。苗場山。八海山。その他外ふもありその石軟（なんじやう）弱（よわ）いへんを
りつてす犯（はん）をべき木の軟（なんじやう）ある石ありいろは青く黒（くろ）てこまをくわせば
石綿（せきめん）を出（だ）し此石を得（え）て試（こころ）ふ小石中（なか）在（あ）る石綿（せきめん）といふ木綿（もくめん）を
細く袖（そで）を三分（さんぶん）とふちぎりすすみのうり是を紡績（ぼうせき）もる小祕術（こひじゆ）

ありて火浣布を造るより其祕術を得バ小女子も火浣布を織るべ
○主元我驛中小糸荷屋喜右門とのへりの石綿を彷彿する事少千思
万慮を費一竟ふ自らの術を得て火浣布を織りセリ又其頃我近
村大澤村の医師黒田玄鶴も同様火浣布を織る術を得たり各
祕一そぞの術を入ふ傳へざるかアド時をアド村つまみてかアド火浣
布の奇工を得るも一奇事なり是文政四五年の間の事なり此兩
人の説をきく小力をつくす文以上あるを織うべ一あとも其機工容易
かとアリ平賀源内ハ織を五六尺ア過むと火浣布考ふアリまた玄鶴ガ源
内ふまきアリ事ハ玄鶴ハ火浣布の外火浣紙火浣墨の二種を造
ミアリ火浣墨を以テ火浣紙小物をミ烈火アリア火アリアを參
クホトロヒア火氣ミムシバ紙モ字モミムジアホミヅル其實用
をレバ火浣布も火浣紙も火災の供ひア憑 どアレレアヒア火アリ
ノ好事情家の一詰小供す

雪譜二編卷之下

廿七

文溪堂藏

遇バ俱ふ火となり人ありて火中よりひざまア火と俱ふ碎け形をレ
キナダ灰とあざるのミアリ觀具も用うる所ナシアア一源内
死アリ奇術絶アリ小件の西人アリ火浣布の機術再世アリア一
鸣呼可惜此兩人も術をつゝモアリ役アリ火浣布アリバ母ア絶
アリカの源内ハ江戸の饑地小火浣布を織ルゆゑ其聞え高くアリ
兩人ハ越後の僻境小火浣布をアリ一ゆゑ其名低一ゆゑあらアリある
ノ好事家の一詰小供す

○弘智法印

弘智法印ハ兎玉氏下總國山東村の入アリ高野山アリ密教を
学び後生國小飯アリ大浦の蓮花寺小住一行脚一と越後小來アリ三
鳴郡野積村(里言海雲山西生寺の東)岩坂との所小錫をアリ草
庵をもとアリ小貞治二年癸卯十月二日此庵小寂セリ辞世トモ

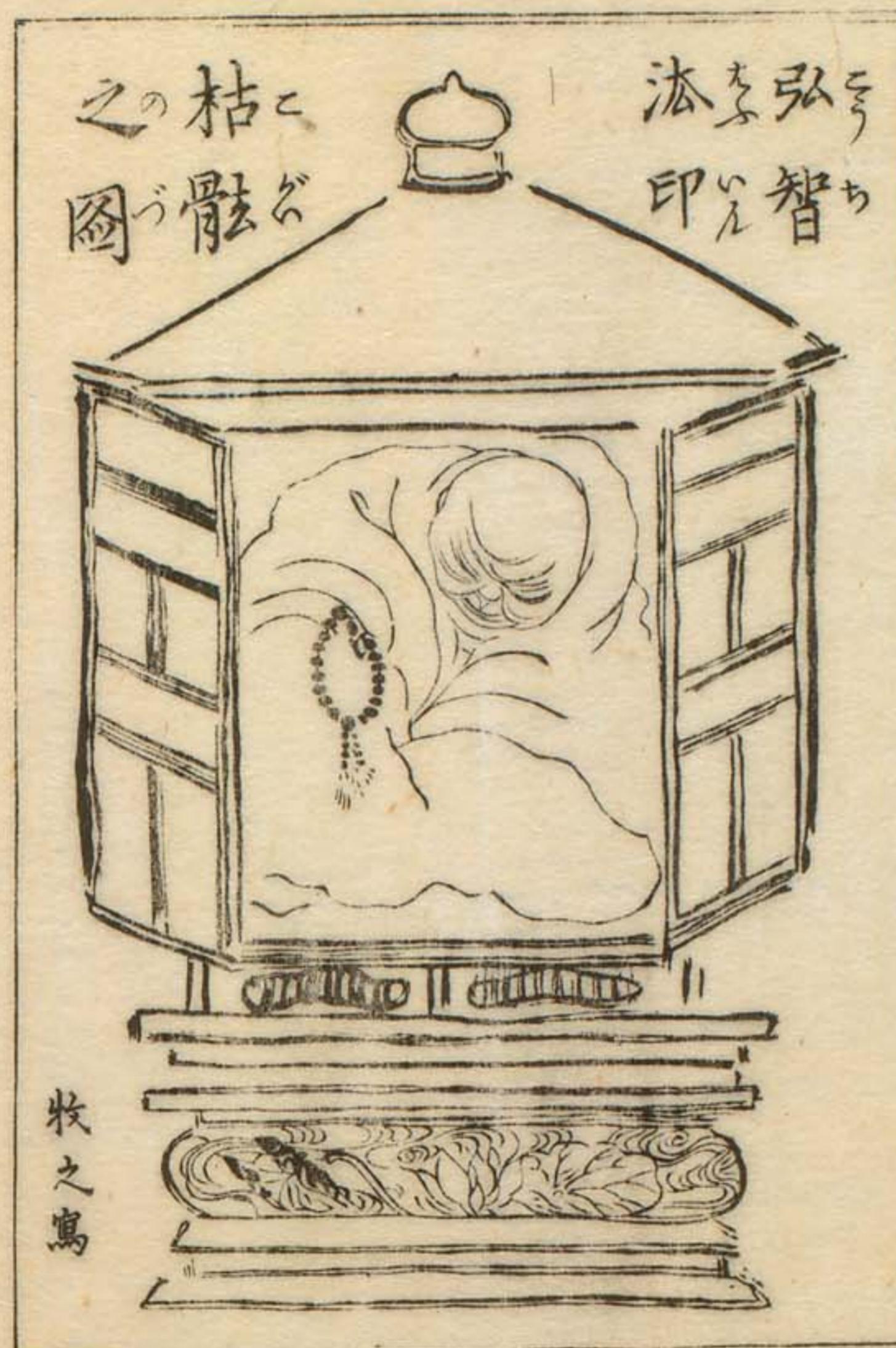
口碑ひみつてゐる哥お山石坂の主を誰だと人間ひとを墨繪すみゑ小書こしょ—松風の音
遺言ゆいごんありとく死骸しがいを不埋ふまい今天保九あまほをきる事四百七十七年よふり
りく枯骸こがい生うる如ご一星一せいを越後えちごサ四奇よんきの一小數いっこうふ此事こと雜書ざしょ
散見さんけんをまとも圖ずをのせて下りのうへやゑ小圖こずゑをとふいどそ此圖
ハ余ま先年ま下越しもえつ後あとかわとびー時とき目擊めげきーた所ところ見み所ところ面
部ぶぶの手足てそくハ見えど寺法てらぼありとて近く觀みる事をやうさび閉眼ぢを
皺しわありと眠ねりする如ご一頭巾づきん法衣ぼういハもじのまゝあらわす
是ぜ他國ほかくに聞きる越後えちごの一奇一き跡あとあり

百樹曰唐土とうどゆも弘智こうち小似おほる事ことあり唐の世の僧義存ぎそん没ぼつて
のち戸とを画ゑ中なか小置おき毎月其徒その徒ことをひくひく一丸髪まるはつの長ながるを剪きる
蘿常まろつねとを百餘年へを経くても廢あつせざりしが後國のちくにのそびれるふ
因いんてことを火葬ひなまつせしとぞ又宋人そうじん彭乘ぼうじょうが作墨客くろがく揮塵きじんふ

雪譜二編卷之下

廿八

文溪堂藏



○ 土中の舟

蒲原郡五泉の在一里ま下新田しんたとくの村むらあり或年此村の者もの度
ありと阿加川あががわの岸きしを掘く一土中どちゆうより長ながき三間さんげんを掘くの船ふねを掘く

婦入ふりゅうの手て摸もらひに
より丸髪まるはつのびざりと
とぞ事ことハ五雜組ござく小
記きて枯骸こがいの確論くわんあ
まども新氏しんしを詰さふ
似おなる説せつをばらふ
贊さんせど存在が度ありと
詳究しょうきゅうせど

全体少ま一も腐く形かたち今まの船ふな小異きわみのまあま金具きんぐを用もちばま處おみう
鯨くじらの鬚ひげを用もちす鉄てつをもよどこす處お木きもまま何なんの木きもを
弁べん者ものあまくちくちハ異國いこくの船ふなとうりしをよ余よ下さ越こ後ご小遊こゆ
一時いつ杉田村小野佐五左門すぎたむらののさぶが家いえかの船ふなの木きも作りたたる硯箱いんばを見み
一時いつ杉田村小野佐五左門すぎたむらののさぶが家いえかの船ふなの木きも作りたたる硯箱いんばを見み
一時いつ杉田村小野佐五左門すぎたむらののさぶが家いえかの船ふなの木きも作りたたる硯箱いんばを見み
一時いつ杉田村小野佐五左門すぎたむらののさぶが家いえかの船ふなの木きも作りたたる硯箱いんばを見み

○白鳥しらとり

前ま少まり如ごく雪譜せいけいと題あるまの他事ほかことをいふは哥およりよ落題らくだいされ
ど雪ゆきいま末すゑひづ姑お母めひづとふままそそ○天保三年辰四月
我わ住す塩澤しおざわの中町なかまち小鍵屋こかぎや某の家のいえやよりよ喬木たかきあり此樹この小鳥こね巢巣を
むむちび雛ひな稍すこ頭かぶをいふそろ巢巣のうちふ白しらきき頭かぶの鳥とりを見み主人怪あし
人ひとをいふそ是ぜを捕つかひら小全ぜん身みハ鳥とり小こ白しらく觜眼足くわまな赤あかき鳥とりの雛ひな
ううり人ひと奇きとく集あつり觀み主人俄あ小籠ことうを作つく心こころを盡つくし養くひ

や長ながドく鳴音きなこゑも鳥とり小異きわみをま我わ近隣きんりんうまだ朝夕あさくさととを觀み
奇鳥きとりうまどもふ入い多く江戸えど出で觀物けんぶつ小せんこせんうまりひーも有あい
主人しゆじんをいふそ食くをね事こと雪中ゆき山さんの鼈かめ瓶びんをいど餌くわ小こ乞こ
人ひと家いえふきてて食くをね事こと雪中ゆき常つねうまど此こ此こ所ところ為ため小こ乞こ
人ひと家いえふきてて白しら鳥とりハ羽は毛け様よう下したふありりとと初はじ編へん白しら熊くまの事ことを載のりまうま白しら鳥とりもままととふ記き一いね

○兩頭りょうとうの蛇へ

文政十年亥いの八月廿日隣驛隣驛六日町六日町の在余川村余川村の農人太左門太左門の軒端のきわ
小兩頭りょうとうの蛇へりそすを捕つか長なが一尺いっしかかどどの頭かぶニ二並ひびく枝えをいふそも
ののりりううももかからら常つねの蛇へふくどどあまふくせせ古古きき箱はふくりり餌くわも
りりとと一い小二三にさん日ひをいままりり逃なれなややアアををたたびび一いととぞぞをを
ささうう一いととぞぞ

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村とひりありとす小郡殿の池とて四方三町斗の池ありて浮嶋十三あり晴天風あき時日出とば十三の小嶋あり離散く池中小遊ぶが如一日入とば池の正中ふあつまつて一つの嶋とあり此池不種くの奇異あきども文多けとばあるまば羽州の浮嶋ばかりのあも記し人の知る處あまご此うきもはいある人まとあり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面ふ小社あり石打明神とひり昔より祀る處也そり縁起ハ聞りせり贅肉あらむ此神をひり小石をひりくわいがを撫社の椽の下の簾子の内(投りきく)小日あくをひりくわいがのまつる事奇妙うきえうげりとて小石ひきう形ありとひりくわい人の圓ちうごく圓石とあらも又奇妙うきうきとバ社のえんの下小大小の

○美人

圓石滿まちうり○百樹曰余も小千谷ふ遊びー時此石を視て話柄小一ツ持帰んとせー小所の人のひかず此神是石を惜ミ玉とひりひつてとまで取るをりぬ處(アーツ)視する小數万の石人の磨き玉のどく凡神妙ハ肉知を以て測べ

雪譜二編卷之下

三十

文溪堂藏

百樹曰小千谷の因ひり余小千谷の岩居が家ふ旅宿せー時天保七年八月或日筆を採小倦山水の秋景を觀て獨歩ひて小千谷の前小流と川小臨園ふのびり用意ーと書をく毛簾を老樹の下小あき煙くゆせつ眺望バ引舟ハ浪小遙りくうごとぞうが如く下る舟ハ流小順ふと飛小似と行雁字をくべ歸樵画をひく群木ハ少く霜を染て紅く連山ハ僅小雪を載て白く寒國の秋景江戸の眼を新小うーかりとぞ一絶を得あどーと志

かくうをあわするをアーモ十六七の娘三人あらへ柴籠をせらひ山水小目を奪ひとふ火をアラキシとて烟管アリよをする顔を見たば蓬髮素面みて天質の艶色花とすりアベ玉あら比アベ百結の鶴衣比趙璧を羅む余愕然一山水を棄て此娘を視る一楫アリ去り樹の下の草小坐アリとあげざまをるの火をうちこむもめ三人ひとく吹烟双無塙獨の西施と語るハ蒹葭玉樹小よりア如く皓齒燦爛トコロハ白芙蓉の水をいで微風不搖アゴト一嗟乎惜アカミ美人も星邊鄙小生ニ脇庸頑夫の妻トアリ巧妻常小拙夫小伴モ眠リ荆棘と俱小腐らん事憐ア堪アリ若江戸小いづま朱門小解語の花を開あひハ又青樓小搖泉樹の榮をアリ此隣國出羽小生アリ

雪譜二編卷之下

三一

文溪堂藏

小野の小町が如く美人の名をもうそア此美人を比僻地小出ア天公事を解きまふ似アリと獨歎息アリ言んとテふ娘ハ去來とくアビ柴籠をせらひうち立キリけり目送アリ越後み美人多アと人の口實アリアリ是無他アリ水小ようやくアリさまで織物の清白アリ越後の白縮小勝アリキアリとまづひつ旅宿小帰り云々の事アリ美人を視アリと岩居小語りけどバ岩居アリ渠ハ人の智美女アリ先生を他國の人と眼解欺アリなどの火を借るアリ可憎アリ吾たゞの火を借て美人ふえん烟縁をもびーと戯言アリ岩居手を拍ア大笑ひ先生誤りアリ屠者の娘アリと聞く再び

辨然たり糞壤妖花を出そとへかゝる事ふぞひひりうるべ
○再接ふ小野の小町ハ羽州の郡司小笠の良實の女うり楊貴妃ハ
蜀州の司戸元玉が女うり和漢俱ふ北国の田舎娘世ふ美人の名を
つて北方ふ佳人ありといひも北ハ陰位うまに女ふ美粟を出そ
みやわん二代目の高尾ハ治野州小生き初代の薄雲ハ信州小產て
とす小北廊ふ名をうせりとまとば越後小件の美人を見しも北国
うまとばうるべ

○峨眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月新羽郡越谷の漁人御封内ありある日椎谷の
海上ふ漁りて一本の流漂ふを見て薪ふせどやとて拾ひ取て家ふ
くり水を乾さんとて底ふを寄りてを椎谷の好事家通りかり是を
見やたうぬ木となりひ熟視ふ峨眉山下斎とりひ五大字刻りあり

雪譜二編卷之下

三十二 文溪堂藏

しをうづくかの國の物とかひの漁入ゆく薪をうて乞ひうけあるとぞ
きそ余が旧友觀勵上人ハ椎谷の田沢村強学の聞えあり嘗て好事の癖
あるを以てかの橋柱の文字を双鈞刊刻して同好ふもすり且橋柱小題
ちる吟詠をこひ是も又梓かして世ふ布んとせよとて故ありそしも
不果うの橋柱ハ後ふ御領主の御藏となり一とを椎谷ハ余が同国うき
ども幾里を隔てまじ其眞物を不見今ふ遺憾とを姑傳寫の圖を
以てうふ載つ。百樹曰牧之翁此草稿ふやう番を見よふ少くも所存
百樹曰了阿上人ハ和哥の友相場氏ハ椎谷侯の殿人ときて上人
の紹叙をうづく相場氏ふ對面へ件の橋柱の事を尋ひふ
余ふ謂ひ橋柱ふあづ標準うりとを俗ふ書翰帯とりふ物
ふ作りうを出そ其圖を示す余が友の画人千春子が真
物を傍ふをまく縮圖う娥眉山下斎とりひ五字ハ相場氏

まづ心を深めてうつさまうとぞ 下下の圖もる形する人の頭を
左りふ頤せその下ふ五字を用つてハ是より左り峨眉山下
橋よりと人ふをもゆる標準よりとくとく是あく美理
渙然ワカル今俗ふ指をもぐまそものもくふをしゆ所を記
するを間もる事あり和漢の俗情もく事あり。さて此標準
を得て実事をもてふ北海ハいづとの所も冬ふいとまご常
北風烈ホリ磯物をうちよもる椎谷ハたきりのふとびき所
ゑ貧民拾ひ取りし薪とうも事常よりあらふ文政ハ酉の
十二月例の如く薪を拾ひ小出トドふ物あく柱チラのごとく浪ふ漂ふ
をもどぶ人の頭とものる物あく甚兎患タヌキ貧民等惧モロコシむ
きりりのうげより見居スルふ此の竟不殘ふうらあげモリを
見立よりこたふ文字ハあまども讀者うく是ハ何の

雪譜二編卷之下

三十三

文溪堂藏

みんとまみぐ評ヒサシ居ハシきりハシふ近アツ西禪院の童僧
通りかハシ唐詩選カウゼンゆくがえする峨眉山の文字を讀こまへ唐土の
物あくと見て貧民拾ひて持つてハシまそづ小唐土の物と見て薪も
せざりハシ此事ハシ闇傳ハシ竟ふ主君の藏ハシとくと語ハシま
○按ハシふ峨眉山ハ唐土の北ハシ在ハシ峻岳也富士ふもくづぎ高山
うり絶頂の峯双立ハシ八字をあそや峨眉山とひふうり此山の
標準日本ハシ北海ハシとさうたる其水路を詳究せんとて唐土
歴代州郡沿革地圖ハシ小拵ハシ清國の道程圖ハシ中を檢ハシふ峨眉山
ハ清朝の都ハシを距ハシ日本道四百里許の北ハシ在ハシ此山ふ遠ハシぞ
一ハシの大河東ハシ流峨眉山の麓ハシの河ハシ皆此大河ふ入ハシ此大河
瀘州ハシを流ハシ三峽ハシのあとを過ぎ江漢ハシ至ハシ荊州ハシ入り洞庭湖
赤壁ハシ潯陽江ハシ揚子江の四大江ハシ通ハシ江南を流ハシ酒ハシ東海

小入る是水路日本道五百里を下りうりきて件の標準洪水にて
水小ひけん。洞庭。赤壁。潯陽。揚子の海の如き四大江を蕩漾周
流。朽沈を縋くつ。水路五百餘里を流きて東海入り巨濤小
千倒。一風波小万顛をもどす。斬折碎粉せむ。直身挺然と。我
國の洋中漂ひ北海の地方小近より。椎谷の貧民小拾もて始
水を辞し既小一燼の薪とある。乞を幸ふ字を識者小遇ひて死灰を
のぐと。韻客の為ふ題咏の美言をうけてゐのをあくび竟ふ
椎谷侯の愛を奉じ。身を宝庫小安ん。ド万古不朽の洪福を
保つ。叟奇妙不思議の天幸あきとば實小稀世の珍物あり
緒圖左のど

丈一丈餘。脇二尺五寸餘。木質弁名。さく

峨眉山下齋

登苗場山之圖

霄間清露濕衣中

寒際平幕四全羽

呼吸極か通帝座

徘徊却愧問天人

吐息毛雲とや

カノ舞葦の秋
秋月庵牧之



按さむる小蛾蛾同韻が 五何反か とと 通と 相通と 往く 書見し 橋は を 奮まつ 小
 作な 了頗ま 異休ふ 依よ 乎 明人黃元立だ 字考正誤清人顧炎武せ
 亭林遺書ひ 中か 小在あ 了あ 金石文字記あ 乎ハ 碑文摘奇ひ 藤花亭十種
 あう 乎ハ 楊霖竹菴ちくわん 古今疑き 中か の字脉み の部ぶ 乎ど 通卷と 一遍搜
 索さ 乎と ども奮まつ の字す 乎ハ 蛾眉山がびさん のあう 蜀しょく の地ぢ 乎へ 都と 去さ 事
 遠と 乎き 僻境きき 乎あり 推量すうりょう 乎ち 小田舍こたの の標準ひじゅん 乎と 学者がくしゃ の書か 乎ゆ
 あう 乎と 俗子ぞくし の筆ひ 乎べ 乎と 我今ご の俗竹ぞくちく を竹たけ 乎と いふ 誤
 の類る 猶博識よはくしき の説せつ を俟ま

○ 苗場山

苗場山ば 越後第一の高山う 乎あり 魚沼郡う 登の 二里と の絶頂だ 天然てんねん の苗
 田た 乎あり 依よ 乎昔 乎より 山の 名な 小峰お 峰ぼう の巔み 小苗田お 事こと 甚奇き 乎あり
 余其奇跡きせき を尋たず 乎と 事こと 年と 乎あり 小文化八年七月偶う 乎ひ たもとも

友人四人・嘯齋・擷齋・從僕等小食類其外用意の物をりて同月五日未明小なもりで其日ハ三ツ僕との驛小宿り次日晚を侵して此山の神職りひすむり一旅をあへ案内者を傭ふ案内ハ白衣小幣を捧げて先まも清津川を涉りて攀かるに至り嶺道を踏嶮路あいりゆを登る小樹森列しんれつにて日を速り山篠生いのき茂りて徑を塞ぐ枯かる老樹折おちて路じ横よこりするを踰ゑるハ卧竜を踏ふく一條の溪河を涉り猶登のぼる事半里許右さ手折ひざともちを左ひだりふ曲まがりそのづる奇木怪石千態万状筆ひらを以うてりひざさー已まハ半途はんとふいとと鳥の声をもきずば殆東西やゑを弁べんドどけ幣めいを道みちを示あし藤蔓とうまん笠かさふまとと籜竹身たけを隠かー石高くたかく徑みち狭く一步い平阻ひよののみちをすすめずめ午ごを下さる頃ごろ山の半はんひより僅すこの平地ひらぢを得て用意えする卧座くわざを木簾きれいをきて食くる暫まく

雪譜二編卷之下

三十六

文溪堂藏

憩くわてまこのぎりくわて神樂岡かぐわがおかといふ所ところふりまうことより他木ほかのふるく俗ぞく小唐松ことうもんとのよりの風ふう小なけとののままである梢こずえハ雪霜せきじょうをや枯かまれりん低ひくき森もりをうへてへかこふあありまこのぎり少すくなくすく御花園おはなぞのといふ所ところ山櫻盛さかりひき百合桔梗ゆりききょう石竹せきちくの花はなをそのまゐる人の植うやきういふ似おなき名なをあくあくざる異草いきあままあり案内者あんないしゃ小問こもんハ薬草やくありといひいひのぎりやきく機鬱きゆく道みちふああり岩いわふととき竹たけの根ねを力草ちからとと一歩い小一声こゑを発はく氣きを張はり汗あせをああ千辛万苦せんじんばんくのぎりくて馬まの背せととの所ところふり左ひだりハ千丈せんじょうの谷くわありもも所ところ僅すこ小二三尺せい一脚いっきゃくをあやまつ時ときハ身みを粉碎ぶふうせせーあ忙いそ忙いそああままて竟いよいよ不絶頂ふぜいたうのぎりくぬ○備そなへ同行どうぎやう十二人じゅうにんまづ草くさ小坐こくわて憩くわふ時とき已ま下さ肺はいうりうりももうち案内者あんないしゃのりひひへ登のり二里にりの険道けんどうをを一日いつ小往來こうりようらいををることああらも絶頂ぜつとう小屋こや在いる小のびる人ひと必ひちの小屋こや一宿いとをを事ことあありり今いまその小屋こやををま

木の枝山木の枝山さ木の枝山枯草枯草をを取りあつらあつらみぢみぢくく小作小作りた
るハ野野非入非入のををづきづきあうあうのここを今夜今夜ののややううふふままああるるももををううりりとと
ええくく笑笑ふ僕僕どどハ枯枝枯枝をひうひうい石石をああひひ假假ふ灶灶ををううりりててたた
食物食物を調調せんせんととああひひ水水をななべべて茶茶をを高高まま上上戸戸ハ酒酒の烟烟ををいそぐいそぐ
ををじじそ眺眺望望越越後後ささくく浅浅間間の樹樹をを信濃信濃の連山連山まま眼下眼下小波濤波濤を千隈隈
川川白白きき糸糸をひきひき佐渡佐渡ハ青青きき盆盆石石ををくく能登能登の洲洲崎崎ハ蛾眉蛾眉をを一一越前越前
の遠山遠山ハ青黛青黛ををのここせせりり小眼小眼を拭拭て杖杖來第一第一の富士富士を視視りりぞぞううそそ
ささみみ雪雪の一握一握りりを置置が如如一一人人手手を拍拍奇奇ありありと呼呼び妙妙ありありと称讚称讚を半半
勝勝万景万景應接應接もも小邊小邊ああも雲雲脚下脚下小起小起ううとともも忽忽晴晴日日光眼光眼を
射射了了身身ハ天外天外小在小在如如一一是是絕頂絕頂ハ周周一一里里との奉奉たた平光平光高抵高抵の所
を不見不見山山の名名ふふすすが苗場苗場ととの所所どうどうここふふありありそのよよる人のほほくく
する田田の如如きき中中小小人の植植ううやや小小苗苗ふふ似似する草生草生ひうひう苗代苗代を半半とと

雪譜二編卷之下

三十七

文溪堂藏

ののううつつややううきき所所ををあありりととももをを奇奇ありありととすす小此田此田の中中小蛙蛙臺臺釜釜もも
ありて常常の田田をを事事屋屋又又はは多多日日もも田田水水枯枯ととニ里里の巔巔小此奇跡奇跡を觀觀ること
甚甚不思議不思議の灵山灵山ありあり案内者案内者りりかか御花園御花園よりより別別小徑徑ありありて竈竈
岩窟岩窟とりとり所所ありあり窟窟の内内小一條一條の清水清水ああごごととのややうう小古錢古錢多く多く銭口銭口二二
掛掛りあり神神を祀祀むむととてて絶頂絶頂如如斯斯とりとりひつひつすすととの今今ハ草木草木小塞塞き
ててままららざざとととと外外火火をを燒燒ううび食食ををううののひひ酒酒をを
桃燈桃燈ををささげげくくありありヒヒ外外火火をを燒燒ううび食食ををううののひひ酒酒をを
人人詩詩を賦賦一一哥哥ををよよとと俳俳句句吟吟奥奥ももりりてて時時ををううつつたたりり寒寒
氣氣次第次第小烈烈用意用意の棉棉入入もも志志ののにによよてて終終夜夜燒燒火火ををあありりてて夢夢
ももううおおももううららりりそそりりままううびびふふををよよううたたななばばいい御御來來迎迎をを辨辨

たまへと案内がいのふを拜まつ所ひより日の昇のるを拜まつて山
を下おぎまく別べ紀行けいこうありこそよ。○百樹曰余越遊よあらう。時牧之老人ふじ此山の地勢
を委ます。眞景しんけいの圖づをも視みる。小巔こねの平坦へいたんの苗場なばの奇異きわい竜岩
窟くつろの古跡こせき。水みずも自在じざいの山さん。上あ古人こあり。此山をひいた
絶頂ぜつとうを平坦へいたん。馬まの背せの天險てんけんをなめ。小住居こすみや耕作こうさくをも
くらぶ。そのち其ま冥魂めいこんをふとまつりて苗場なばの奇異きわいをもともと思おもひ。國史こくしを搜究さがしきゅうせ。其徵まことも端はを得えべ。や博達はくだつの説せつを聞きん。

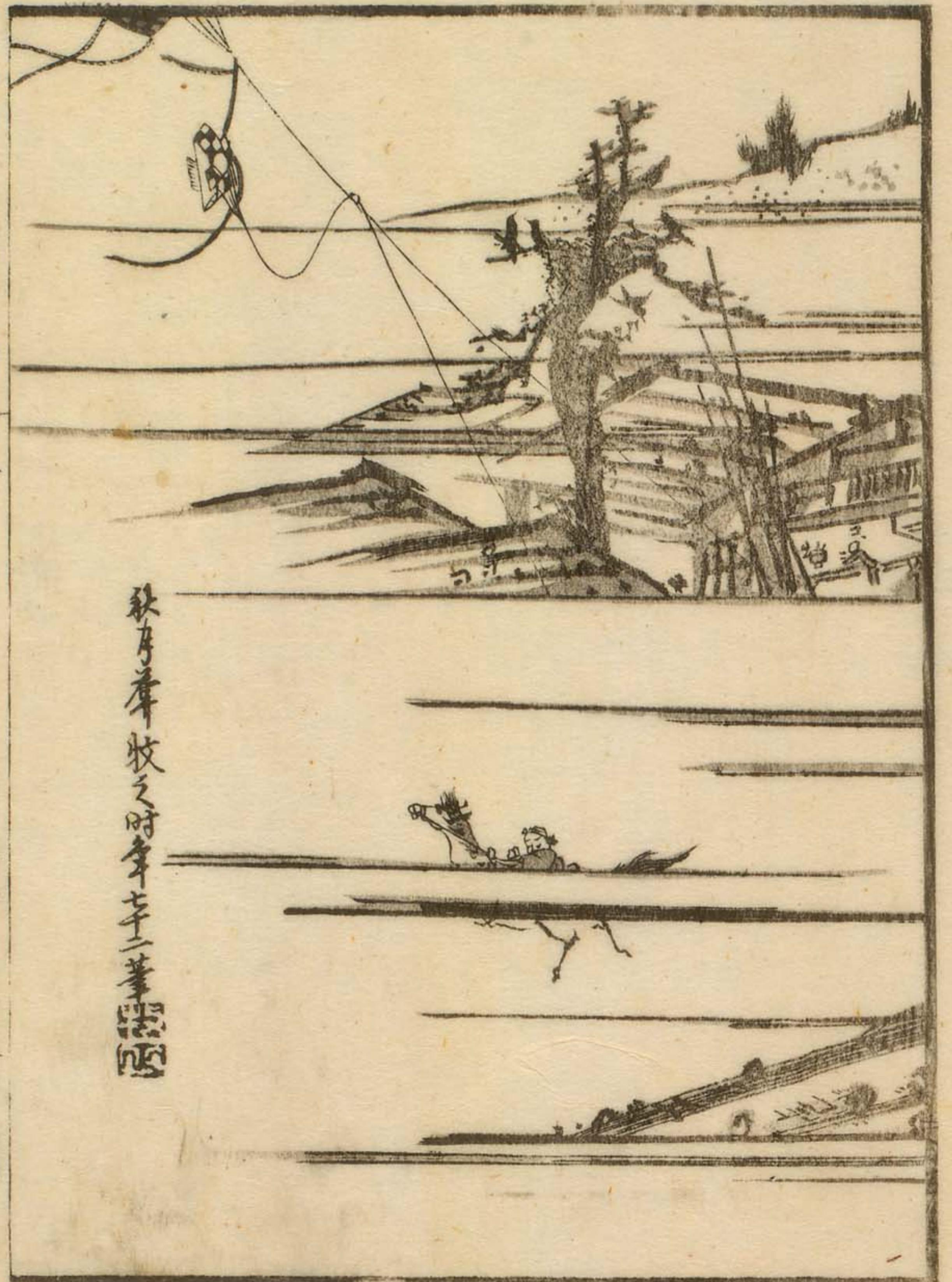
○三四月の雪

我国久々まづ春はるふうりても二月頃あまで雨降あまふ事こと。雪ゆきのあらゆゑ
あづ。春はるの半はん分ぶん少すくない。小雨こあめ。日ひあり。此時このときふいづれ。晴天はれ。よりとより雨
ふも風かぜ。も去年きとしより積雪つみゆき。小雨こあめ。少すくない。家居いじゆ。少すくない。乾かわ
北東ほくとう。ある。方ほうまある。事こと。山さんの雪ゆき。里地さといち。よりもきあら。變かわ。そけ。とど

雪譜二編卷之下

三一八 文溪堂藏

市中四月雪解圖



春陽の天然ふつとて 雪解ふ水増て川ふ水難の患ある事、年々あり
 春のをもふひままで人の住あつりの雪が自然かきゆるをまよぞして家毎に
 雪を取捨るふあひハ雪を籠ふのまくまくもありありあひハ鋸みて雪を
 挽割くそそぐ一又ハ日向の所、(松木のごくつみきのとくもやりかぎりふを
 そぞくることをきやゑうす灰をうそだまゆきもとく去年冬のそぞらより雪
 のあざる日も空曇りく快く晴るそくを見るハ稀みて雪ふ家居を降理め
 らき手もとさへひとと星ふ生と是ふ慣て年この度うまとす雪ふあり
 ちよがいのびく勝然とく心なづくすあつるふ春の半ふひす雪岡を
 取除き日光明くとくもとくもトマ人間世界へひそするあちぞせく一年夏
 の頃江戸より來りて行脚の佛人を停むてふ謂す比國の所くふひより
 見る小富家の度あへ手をつじてゐもあまど埴ハラヅミ粗畧ふく假初
 作りてすやううりゆううあふやといふ答えしゆいがうりのふもとくううりがり

そめ小作りかくハ雪のやゑうりんとあまびつやどつとく作るとも一丈のうへ
をも雪ふかく崩すゆゑあらうつてもきて雪のそぢやかは此道をとりのうき
と語り一事ありき三月の末ふいと雪のそぢやかは此道を作ることあり
まこと又雪中ハ馬足おさもたゞ耕作うせぎと馬ハ空むすく厩まふあそびをかく事凡
百日あまくへ我国小牛のみ雪あるの時ふいと馬もとくあらうとまつりう
嘶ひきき路じふそんとも心あり入も又々へちぢらする足をのぞせんと厩まを
ひきいざをばうこうじくをねあがりうきどもを胴どう縄なを馬まに騎まり雪消の
所ところからす此馬冬とうどよりの飼くわふよろく瘦やせると肥あつるやせと馬
主の貧すくなさもあらうのあら馬のまわく童わらわ雪のそぢやより外遊
ある事あらうと小夏こなつのそそとふよろくと冬とう履はき稿こう沓くつをもく
草履くつやふくらり屨くつあらかげもととそとうききうらうと桃
櫻さくらも此とうをさうりぬく雪ゆき世外せいがいの花はなを視みるうり

雪譜二編卷文下

四十

文溪堂藏

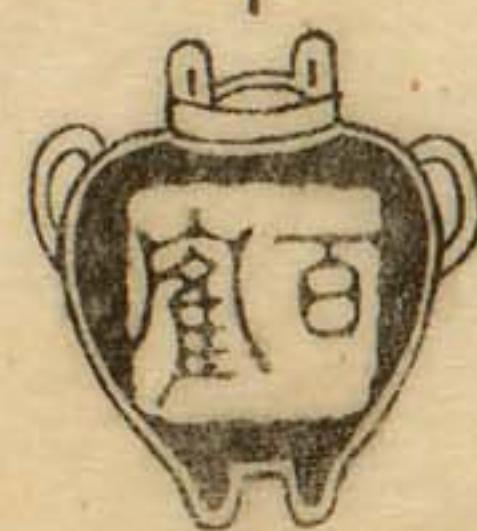
○鶴恩かね小報しらべ也

天保七年丙申の春我われが郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号ひごうを
二松といふすの商ひの爲西國せいこくふくらり或城下まち下し小逗こづの間旅宿の主ぬしがも
一小此近在の農人のうじんあらしが田地のうち小病鶴つるありて死ふらうんとするを
見つけ候くわる人參じんさんか鶴の病びょうを養く�く一日あらむと病癒びようて飛去とけり
また翌年つとめのとしの十月鶴二羽ふかの農人のうじんが家の庭にわらしく舞まいぐり稻いな二莖にねを落
ト一声ひとこゑで鳴なて飛とけり主人拾あつひらうく見るふらうと見みる何なんもあきあきらうと
も是これはつまく長く穗いねの枝えだ小稻こいな四五百粒よのり主人あらうと去年きとねの
病鶴恩つかれん小報しらべんとも異国いこくより啞のえまうと見みる何なんもあきあきらうと
うき稻いなうりとも領主りょうしゆ小奉こぶりけふらうとあらうと見みるその
まゝ主ぬしふなまうと見みる何なんもあせふよりと苗なのころふいと心こころをつゝ
植うつけたり小鶴つるがあつてふらうとよく生うひりでけよだ國くにの守まつを奉まつり

一とくより東五郎猶との村の入をも尋まひ鶴を助けよる人ち
東五郎縮を賣る家うまびきあらの家小いり猶委く聞てまこと國の土
産小せん穀を一二粒賜ひりともけみどあすド越後ハ米のよき國とまひバ
ヒトさく小生ひえり五六六十粒うるを國持つて事の来田をやて
邦君小奉ひを御城内小植し玉ひ東五郎御褒賞うど在」と
小千谷の人ちの頃物ごまくすく小余がどと賤農もかくめでま
御代小生きとまくこそ安居一てかくる筆も採うとまく千年的昌平を
いのく鶴の話小筆をとぶりつ猶雪の奇談他事の珍説あふ漏
するも最多けれど生産の暇うすび編を嗣ぐ

通卷画圖

京水 岩瀬百鶴筆



北越雪譜二編四卷大尾

雪譜二編卷之下

四一

文溪堂藏

○和漢印章考

五卷

京山人百樹翁著述目録

○食物沿革考

五卷

昔の食物と今の中の食物の沿革を弁ト食器の古圖あまとのを
諸書を引て考をもと

○和漢押字考

三卷

俗小書判とりより起原をもとまんの作りやうを論弁せり

○骨董集三編

二四編卷

醒齋京傳先生遺稿

京山翁增修

○女粧考

前後六卷

○芭蕉年譜

三卷

をも成一代の始終をもと

○高尾考

同

万治の高尾白刃死りといふ妄説を論弁

○茶の湯初心抄

同

茶のゆを学ぶ人以書を三ヶもの大槻をもと
茶席小つくりても耻をもつ心得をもと

曲亭馬琴翁編集

著作堂一夕話 全五卷

此書ハ曲亭翁七百余年の長寿を五十年來見聞せら
まし珍説古今未發の高論あんどを弘く集め新奇妙談
ひとつ隠て名入聽人実小曲亭小對してその話を聞か
諸君近き小發行をすらなまよ

御伽やうよ 全十卷

鶴鶴貞高先生著
閑窓瑣談 全六卷

この書ハ古今の奇談珍説の原本をくわんと小説怪談の書
多くといふも脚伽やうよの上手いもの中和漢の奇談
をぐく卷中小うよて至きる變りく実小怪珍奇談の最
筆の物語うればりの本を作ることありぬべ

豊年先生画

天保十三年

壬寅孟春

全志發行書林

大坂

心齋稿通博勞町

堺

屋新兵衛

河内屋茂兵衛

丁子屋平兵衛藏版

江戸

大傳馬町三十目